

再考アナザースカイ

2021.10.6

昨年1月頃までは、「あなたのアナザースカイは」と聞かれば、「ここが、私のアナザースカイ、イタリア共和国、ローマ」と答えていた。実際には、誰からも聞かれないが。

ところが、永遠の都ローマは、遙か彼方へと遠ざかっていった。それではと、日本国内で考えてみた。それも、近隣の宮城県、山形県などである。ところが、それもままならず、福島県内となった。頼みの会津もあやしくなり、いわきも遠い存在となった。その後も、範囲は狭められ、いよいよ福島市内、それも家と学校の往復プラス α まで追い込まれた。

週末はというと、コロナ対応に加えて、地震対応などで学校に行く日も多いが、ほぼ1日中、家にいることが増えていった。これも慣れてくればどうにかなるものである。

そこで、アナザースカイについて、もう一度考えてみた。何も遠くに行かなくてもいい。ちょっとしたささやかなことでもいい。町内会の班長として、回覧板をまわすときに、自分の家のまわりをよく見てみると、今までは気づかなかったことが見えてくる。週末のルーティンとなっているクリーニング店やガソリンスタンドも、見える景色が違ってくる。何気ない必要最低限の外出を大切に考えるようになる。それが、アナザースカイとは言わないが、アナザースカイのようなものと考えればよい。

ガソリンスタンドで洗車をしている間に、この「校長室だより」の原稿をスマホに打ち込むようになった。ちょうどいい時間である。文章は、いつもとは違う空間で、ゆったりとした気分のほうがいいものができるような気がする。

ささいなことにも喜びを見出すことの大切さを知った。毎週末に遠出をしなくても、それなりに過ごすことはできる。かえって、得るものもある。人は、そうして生きていくことができることを知った。

遠くには行けない分、本来のアナザースカイへの思いは募っていく。家人とは、退職したら行けるかねと話している。そう簡単には行けないのがアナザースカイである。逆に言うと、そんなに度々行っていたのでは、アナザースカイではなくなる。

気がつくとも、週末には毎週同じようなテレビ番組を見ている。それだけ家にいるということである。土曜日の16:30からは、「出川哲朗の充電させてもらえませんか」という番組を見ることが多い。以前から、この番組が好きである。コロナ禍が始まるまでは、土曜日のこの時間に家にいることなど、ほとんどなかった。そう考えると、生活スタイルが変わったともいえる。

このコロナ禍が、いつかは終わると信じて、日本中の人たちが、いや世界中の人たちが、日々精一杯生きている。皆、それぞれのアナザースカイを心に描きながら。